

平成 27 年度 研究成果報告書
Research Achievement Report FY2015

Date:

日本語・日本文化専攻長 殿

To Dean of Studies in Japanese Language and Culture

講座名・職名 Course Title・Job Title	日本語日本文化教育センター
氏名 Name	岩井 茂樹
専門分野 Academic Field	日本文化史・比較文化学

主たる研究テーマ Principal Research Subject	視線の文化史-江戸時代の絵画を中心に
<p>日本絵画、とくに明治以前の日本絵画に登場する人物の視線のほとんどは画面の中に向いている。たとえば美人画や役者絵、絵巻物など、当時描かれた絵の中の人物の視線が画面の外に向くことはほとんどない。それに対し、西洋絵画では 15 世紀のルネサンス期以降、中国では 17C の清代以降、画面の外に視線を向ける人物が飛躍的に増加する。なぜ世界のどの地域においてもある時期まで人物は画面の中を向いているのか、また西洋絵画や中国絵画と日本絵画の間に視線の時間差がなぜ生じたのか、日本文化において視線がもつ意味とは何か、といった問題を明らかにすることが本研究の目的である。</p> <p>これまでの研究において明らかになったことは、どの地域でも元来絵の中に存在する視線は神仏などの超越した存在のみに許されるものだったこと、それがルネサンスのような人間回帰の動きや、宗教的戒律から解き放たれる過程で視線が画面の外へと向くようになったこと、数は少ないものの江戸期にも視線を画面の外に向ける人物がいること、そしてそこにはある一定の約束や偏向があること、などである。この研究成果の一部はすでに「視線の文化史（1）- 「美人画」の場合」（『日本語・日本文化』第 43 号、2016 年 3 月）として発表した。今後引き続き役者絵など他のジャンルでの分析も合わせて最終的な結論を出したいと考えている。また将来的には絵画だけではなく、文学や人形など、視線が関係するさまざまな分野の解析を通して、日本における視線の文化的変遷と意味をより総合的に明らかにしたいとも考えている。</p>	